

「私の使命」 防府教会 中学二年 マリア・ビシタシオン 石川 花恵

私は、被災地ボランティアに参加したのは今回が初めてです。姉と二人で参加しましたが、行けてよかったと思いました。いろいろなことを学べたからです。

被災体験のお話を聞きました。地震の後、小学校に避難したけれど、寒かったので自宅に毛布を取りに帰り、また学校に戻ったそうです。もう一度ものを取りに自宅に戻ったとき、中学生の娘さんが「行きたくない。私だけでもこのまま家にいたい」と言ったそうです。ですが一緒に車で小学校に戻り、その後津波が来たので、助かったそうです。「あのとき娘が家に残っていたら、自分は娘を助けに車で家に向かっていただろうし、そうしたら二人とも助からなかった」とおっしゃっていました。

私は、自分だったら、と考えてみました。家族で避難していて一時帰宅したときに、誰かが避難したくないといったら、説得するだろうし、私も一緒に残ってしまうかもしれない、と思いました。その後、交差点で車が道を譲ってくれて、それで助かったということでした。その時間、そのささいな選択が生死を分けるとは思いもしなかつただろうな、と思いました。紙一重で命が助かるということ、肌で感じました。

車の窓を開けないという条件でなら通行が許可されている原発の近くまで連れて行ってもらいました。そこ以外（警戒区域）では、いまでは放射能濃度は他県と変わらないようですが、福島県全体に対して、根強い放射能差別が広がっているということでした。津波で、家も命もすべて流されてしまった人たちがいる一方、原発の放射能被害で、命は助かって、家もあるのに帰れない、という人たちもいます。津波被害と放射能被害で見舞金の額が違って、住民間にあつれきが生まれ、地域社会が崩壊してしまったそうです。ボランティアに参加したい人がいても、家族の反対にあつて来れない、という話も聞きました。

カリタス・ベースでは、毎晩、参加者全員で分かち合いをします。参加者の高校二年生の女の子が「私は震災当時のことをあまり覚えていません」と言ったとき、スタッフさんがショックを受けていました。幼稚園の子どもたちの見守りに行ったときに、「この子達はみんな震災を体験していない」と聞いて「確かに！」と思いながら、驚きました。8年の時の長さを感じました。

『遺体明日への10日間』という映画を見ました。その中で、妊婦さんがなくなったり、子どもとはぐれてしまった母親が、子どものお棺のそばから何日も離れられなかったりしていました。遺体安置所で働く市役所の女性が、小学生の女の子が亡くなって「なぜ自分が生き残っているのか。生きてるのが申し訳ない」と言うシーンがとても印象的でした。

私は今回のボランティアで、分かっているつもりでいたけれど、本当にはまったく知らなかった事実をたくさん知りました。いちばん学んだことは、「私はこんなにも知らなかったのだ」ということでした。

今、私には温かい家族があり、家があり、不自由のない暮らしをしています。健康な身体、二十四時間を使う自由を手にはしています。私は、福島に行って、それらは、あつて当たり前のもではなく「身近な人のために使うように、と神様から与えられたものなのだ」と感じ

ました。それらを手にしてしている自分には、託された使命があるのではないかと考えるようになりました。

まずは、健康、自由、時間、家族、環境などの神様から与えられた貴重な宝物を、大切にいつくしんで生きようと決めました。そして、私の周りの人から掛けられる言葉に耳を傾け、しっかり聞こうと思います。それこそが、私に必要なものを教えてくれると思うからです。進むべき道を教えてくれる周囲の声を聞きながら、私に何が求められているのか、私だからできることは何なのかを、考え続けていきたいです。

被災地ボランティア感想文 石川桃子 「平和の使徒になろう」防府教会

サビエル高校二年 マリア・デル・カルメン 石川 桃子

「2012年3月11日は、どこで何をしていましたか？」（おだかぷらっとホームの廣畑裕子さんのお話しの中での質問）聞かれて、私は啞然としてしまいました。まったく覚えていないのです。小学三年生、九歳の自分は、東日本大震災から一年経ったその日、どこで何をしていたのだろう。

この夏、私は福島県南相馬市へ、被災地ボランティアに行きました。いどこや、私の姉は何度も参加しており、私もいつか行ってみたいと思いつけていました。今回、奇跡的に参加することができ、未知の世界に飛び込んできました。冒頭の質問は、津波被害と原発被害の違いについてお話を伺ったときに、廣畑さんという方から出されたものです。「2011年3月11日のことはみんな覚えている。日本だけでなく、世界にとっても大きな出来事だったから。だけど、一年後には、日常に埋もれてしまって、みんなにとってはただの一日。でも、私たちにとっては、いつまでも特別な日。誰にでも、人生の中でいつまでも忘れられない特別な日というのがあると思うけれど、私たちにとっては3・11」。福島へ行ってみて、私が最も感じたことは、「私自身がいかに何も知らなかったか」ということでした。道路一本隔てて、避難解除地域とそうでない地域が向かい合っています。避難解除地域には、人が戻り、新しい家が建ち、再び町の暮らしが始まっています。一方、道の反対側を見れば、瓦礫が津波や地震の被害そのままの状態で見捨てられています。見慣れた「しまむら」の店内が、8年前から手付かずで見捨てられているのを見て、強くショックを受けました。私は8年間、同じ日本という国に暮らしながら、何も知らなかった。何も知ろうとしなかった自分に、強く衝撃を受けました。ですが、廣畑さんは続けてこう言われたのです。「『知らない』ということは武器になる」と。「知らないからできること、知らなかったからできたことというのがある。例えば、会社で慣例になっていたことをしがらみのない新入社員が改革したり、在校生にとっては当たり前だと思って見過ごしてたことを一年生だけは気がついたりする。私もそう。被災してから花を育て始めて、初めてだから失敗続きで……。そしたら園芸上手なおっちゃんおばちゃんが、とても見ちゃいけないって、いちから教えてくれた。それが知り合うきっかけになった」。

「ボランティア経験のない私が福島に来ているけれど、山口に帰ってから福島のためにできることってなんだろう」福島で、ずっとそう思っていました。この言葉を聞いたとき、私の「知らない」ことこそが武器なのでは、と思いました。私は福島で、被災地に行かないとわからないことをたくさん感じました。実際に見ると聞くとでは大違いだということ学びました。私にできることは、最初に受けたこの衝撃を伝えること。8年経った今の現状をちゃんと知ってもらって、一人でも多くの人に、被災地を体験してもらおうこと。そのためにも、この感想文を一生懸命書きました。

福島で出会った方たちから私がもっとも感じたのは「関心を持って欲しい」という気持ちでした。大震災は8年前の過去の出来事なのではなく、いま現在も風評被害などの被害が続いている「人災」なのだということ。私は福島で、この平和な日本の中で新たに差別が引き起こされている現実を目の当たりにしました。

平和とは、どこかで誰かが実現する遠くの話ではなく、私と目の前の誰かの間にほんわりと湧く温かい波長のことだと思います。私は「相手の方の人生に関心を持って話を聞いて、初めて『聴く』ことになるのだ」ということを、このボランティアを通して経験しました。目の前の相手の人生に関心を持つ。心と耳を傾けて、相手に向き合う。これが、いまの私にできる「平和への第一歩」です。

「2019年夏季東北ボランティア福島・南相馬」を終えて

山口教会 瀬川憲昭

この夏も南相馬でのボランティアを8/5から8/10まで行う事を決め、6月末まで募集をかけました。さて、この夏は何人の希望者があるか待ちました。結果、萩の高校生2名が参加してくれる事に……。早速、出発1か月前に行きのチケットを購入。5日後に帰りのチケットも購入。そして出発当日の朝6時前、保護者から電話があり、「実は、昨日の福島の地震が心配になって、まだ余震もありそうで、今回の参加を見合わせたい」旨の電話でした。山口周辺で滅多に体感したことのない震度で、いろいろ相談されたのでしょう。無理ありません。ましてや女の子を一人で出すことに、不安を持たれたと思います。当然、引率する立場からも、引き留める理由はなく、保護者の判断に従いました。その後、すぐに駅に行ってもキャンセル出来ました。出発2時間前に初めて体験したハプニングでした。その代わりというのも変ですが、1日遅れで、防府から2名の姉妹が参加することになりました。結果、参加者は4名となった次第です。滞在中、心配された余震もなくスケジュールをこなすことが出来ました。

本格的な外での作業は去年の冬、夏の竹林や樹木の伐採作業に続いてとなります。今回は修道院の庭の草刈り、整備と教会周辺の剪定を行いました。自分の不注意から蜂に刺されるという、不名誉なハプニングがありました。長袖は着ていたのですが、教会の周囲の生垣を刈っている時に、右腕に何か「チクッと」感じたので見たら蜂が飛んでいくのが見えまし

た。あしなが蜂とかではなかった様に思います。すぐにベースの方が近くの病院に連れて行ってきて診察を受けましたが、幸い大したこともなく、投薬を受け、診察券迄発行してもらいました。暑い時で結構、患者さんも多かったのですが「ボランティアに来てこんなことになりました」と話すと、結構早めに対処していただきました。病院の皆さんの対応に感謝です。他に待って居られた患者さん、お先に済みませんでした。お陰で、それから大した痛みや腫れもなく無事に作業は終了しましたが、正直、思い出してもその日は暑かった。

今回は、他にさゆり幼稚園の子供たちの見守りを行い、その中で紙工作での貯金箱づくり、手回しオルゴールを聞き、石川姉妹の紙芝居風ダジャレクイズ、ピアノ演奏などを楽しみました。最初の日は外にプールや水鉄砲などが準備され周辺の子供たちを対象にした水遊び大会も行われました。

もう一つは、昨年も一緒に作業をさせて頂いた「真ごころサロン」の草履のストラップづくりのお手伝いです。本当に短い、限られた時間でしたが、おじいちゃん、おばあちゃん達と会話に大笑いしながら、小さなパーツを組み立てていくのは、楽しかったです。昨年、ご自宅にお伺いして震災当日の貴重な体験をお話し頂いた山本ご夫妻もこの場におられ、1年ぶりの再会を喜び合いました。

毎回のボランティアの2日目か3日目位に被災地の視察研修をしていますが、今回、東電が廃炉に関してのPR館として富岡町に設置した「東京電力廃炉資料館」(2018年11月30日開館)を初めて訪問しました。簡単に言えば、東電が2度とこの様な事故を起こさない様に、これまでの経緯やこれから先のあらゆる研究・努力をし、復興に尽力することを訪館者に視覚を通して示そうとするものです。施設の趣旨は理解はしましたが、建物外部、内部展示設備等にかげられた費用は相当のものと想像します。果たしてこの施設に対する、俗にいう費用対効果は如何なものかと思うのと、8年も経ってなんで今頃？ という疑問と、正確に掛かった費用は知りませんが、これだけの設備にかかる費用があるのなら、少しでも被災者の方々への公平な補償に廻して欲しいなど、単純に思いました。

被災から数年は災害廃棄物や汚染土運搬に使われたダンプを多く見ました、その後、少し姿を消した感じでしたが、今回はまた、その姿を沢山、目にしました。その目的は、仮置き場から中間貯蔵施設へ、フレコンバックを輸送する為でした。可能なものは焼却し、廃土も分別して、最終的に貯蔵施設に置かれるそうです。福島市から南相馬に移動する車窓から見る景色が、来るたびに少しずつ変化していくのが判りました。最初はあの黒いフレコンバックが、山肌に隠すように置いてありました。それが、幹線道路横の数か所の田圃の中にフェンスを張り、仮置き場が作られ、何百、何千袋が積まれていくようになりました。そのままの数年が経過し、昨年辺りから仮置き場のフレコンバックが無くなって、更地になってきました。こうやって少しずつではあるが、中間貯蔵施設に向けて処理されているなど、感じました。

この夏、南相馬から富岡町にかけて、道路、建物(工場、住宅)橋脚、鉄道等を見れば、ある地域を除いて外観上は、相当数は元に戻ってきている感じはします。しかし、夜の森公園近くの団地の様に道1本隔てて、帰還困難区域と避難指示解除区域に分かれる不公平さはどう見ても理解が出来ません。又、逆に避難解除で帰宅可能になっても、色んな事が重なっ

て帰ろうにも帰れない被災者・・・本当に困難な事が山積みです。廃炉するにも何十年と掛かり、第1原発内の汚染水貯水タンクもだんだん設置する場所が無くなって来ているようです。その時期が来たら、その先、どう対処するか中々しっかりした説明がありませんでした。

今回のボランティアは、出発前から、到着してから色んなハプニングに見舞われましたが、1日遅れで参加した石川姉妹は初めての体験で良く協力してくれました。この経験をどう受け止めて生かしてくれるだろうか？ 又、今回来ることができなかった萩の高校生2名は次の機会に参加の意思を示してくれるだろうか？

震災から8年が経過し、関心がどんどん薄れていく中で、又、個人的にいろいろ計画のある夏休みの中の貴重な数日間をいかにボランティアに引き寄せるか、こちらもこれから先の大きな課題になりそうです。それでも、今回も無事に終わって、神に感謝です。

2019年 夏季南相馬ボランティア 徳山教会 柴田潔 神父

ボランティアに出発する前夜の8月4日、福島で震度5弱の地震がありました。そのことで参加を予定していた2名の高校生が辞退されました。「それでも行きたい」「お友達は行かなくても自分に行きたい」と決心してくれたらと願いましたが、残念な結果でした。福島に着いてみたら、余震もなく平常の日々でしたしそれを予想してましたが、初めての方が福島に行くにはまだまだハードルが高いように感じました。今回は、現地の方とお話する機会があまりなかったので、見て感じたこと、徳山に戻ってから感じたことを、断片的に書いてみました。

原発事故への備えができるのか？

徳山に戻ってから、9月に予定されている幼稚園の保護者向けの防災講座の準備をしました。きっかけとなったのは昨年末に南相馬市原町区在住の山本二吉さんフミ子さんご夫婦から体験談を伺った際に「自分たちの体験を活かして欲しい」という言葉があったからです。講座のために準備しながら感じたことは「防災への備え」は話せても「原発事故へ備え」の話はできない、ということです。「原発事故へ備え」となると今は全くメディアでも取り上げられていません。それでは原発事故直後、どのようなことがあったのでしょうか？ 2011年に福島の家族を山口に保養に招いた時の募金呼びかけ文書にこうありました。(2011年6月25～27日に会津若松教会で伺った内容)

2011年4月に5年がかりで念願のマイホームを新築したばかりだった。建物は地震の影響なし。原発さえなければ・・・原発事故の後、上水道なしの生活が10日間続いた。自衛隊が給水に来てくれるが長蛇の列で8時間かかることも・・・それが3日間続いた。原発事故の後のことなど教育されていない。水素爆発と聞いても「水素しか出てない。放射能は出てない」と言う程度の理解しかなかった。浜通りの人は大変で、中通りの人は大丈夫。遠ければ大丈夫と思い込んでいた。何も知らずに給水の時に小さな子どもを連れていたら近所のお

ばさんがカップ、マスク、長袖の完全防備で現れた。「どうしたの？」 「何言ってるの！絶対に子どもを外に出してはダメ！」・・・2011年5月～6月は、避難すべきか一番悩んだ。この時期のことは一生忘れない。公けの情報には頼れないから自分で守るしかなかった。「幼稚園の年中の子どもをどうするか？これからどうやって生活しようか？」窓を締め切って、換気扇も目張りして・・・扇風機だけ回す毎日が始まり、日に日に子どもは弱り、おにぎり1つさえ食べる元気がなくなった。自分も病気になってしまった。

主人が会津若松に転勤になった。新しい環境に適用できるか不安もあったがついて行った。閉じこもっていた生活から解放された。「窓が開けられる！息を吸っていいんだ！」この感覚が忘れられない。外に出て遊び回っている子どもの姿を見て涙がこぼれた。「ここに来てよかった！」と実感した。家を建てた場所は、1.2マイクロシーベルトでそんなに低いわけじゃない。子どもを育てる環境じゃない気がする。「あれしちゃダメ！これしちゃダメ！」と言いたくない。クラブ活動も好きにさせたい。地元の学校に戻っても、避難せずに残った子が戻った子をいじめると聞く。お母さん同士のみぞもある。全体が被害者なのにいがみ合う悲しい現実、たまるストレスに耐えられるか？事情があつて戻ってきても温かく迎えてもらえない悲しい現実がある。「これから病気になるんじゃないか？」不安が続く・・・時間が解決して欲しいが・・・。

原発事故は、住民には対策の取りようがなかった人為的災害です。事故が起きたのだから真剣に対策を練り、メディアで放送されていいはずなのに、そうなっていません。スポンサーの圧力・政治的な圧力？このお母さんは事故への対策が進まない現状をどう捉えるでしょう？現在稼働している原発が9基ありながら原発事故への対策が取り上げられてないことを感じました。もう、事故は起きないという前提になってきてないか心配になりました。

「東京電力廃炉資料館」を見て

原発事故を起こした東京電力は何を考えているのでしょうか？8月7日の視察で訪問した「東京電力廃炉資料館」ではこのような説明を受けました。

原子力事故の記憶と記録を残し、2度とこのような事故を起こさないための反省と教訓を社内外に伝承することは、当社が果たすべき責任の1つです。長期にわたる膨大な廃炉事業の全容が見える化し、その進捗をわかりやすく発信することは、国内外の英知と結集と努力を継続させていく上でも大切です。関係施設及び周辺地域との連携を図りながら、原子力事故を後世にお伝えしていくとともに、復興に向けた皆さまの安心につなげるよう努めてまいります。

この説明は、さっと読むと東京電力は反省しているように思います。けれども、原発を推進してきた旧経営陣は、「事故の予見や回避は不可能だった」と原発事故の責任を認めていません。事故原因を真剣に究明しているとは思えません。また、「取り返しのつかない事故を起こしたのだからもう原子力発電をやめます」とは言ってません。つまり、説明は丁寧ですが相変わらず原発を推進しようとしていることがわかります。このような東京電力のスタ

ンスを原発事故で被害に遭われた方は簡単に看破できますが、そうでない多くの日本人は見抜けないのではないのでしょうか？ 巨額を投じた「東京電力廃炉資料館」は、原子力発電を維持するために作られたように感じられました。

「復興」という言葉について

カトリック新聞8月1日号に元カリタス大槌ベース長、片岡英和さんの記事がありました。

6月に南相馬ベースを訪問し、支援活動をしました。活動以上に大きかったのは、震災後8年以上経った現状を自分で確認できたことでしょうか。九州に限らず東北を除く地域では、あの震災もすっかり終わったことのように感じられています。「福島は避難指示解除区域が増加しているので復興が進んでいる」という声も、大槌から長崎に帰ってきて多く聞きました。避難指示の解除とはどういう意味か？ 解除された地域の現状はどうか？ そのことに触れずに「解除」の言葉だけ聞くと、おそらく「復興」というイメージにつながるでしょう。

2019年3月時点の避難解除地域の小中学校に通う児童生徒数は、原発事故前の11%（東京新聞）南相馬においても1087人が126人（11%）にとどまっています。浪江町に至っては1773人が7人（0.4%）しか戻ってはいません。このような現実を知らないで「復興」という言葉を何度も聞かされているうちに「元の生活を取り戻している」と思っていないのでしょうか？ 巨費を投じて防潮堤、道路が作られ、電車が再開されても「復興」になっているのか？ 人々の暮らしはどうなっているのか？ 自分の幼稚園で考えたら、原発事故前は100人いた園児が11人に激減していて「復興」と言えるだろうか？ 毎日、なんとか持ちこたえているだけかもしれない？ 相手の立場に自分を置いてみるとおいそれと「復興」とは言えないことを感じました。

『遺体明日への十日間』の映画

防府教会の石川さん姉妹、小林聖心の学生さんに、津波直後に実際何があったのか映画を観てもらいました。被災地で会う方々はこのような悲しみを体験していることをわかって欲しいと思いました。同時に、日頃自分がどれだけ恵まれ、大事にされているか、再認識して欲しいと思い、上映しました。

カリタス南相馬ベースの活動について

今回は、社協の外作業がありませんでした。2012年から南相馬に来ていますが、初めてでした。浪江社協のスタッフも人手不足でボランティアを束ねることが難しくなっていること、ベースに外作業を積極的にする男性スタッフがいなかったことが原因だと思います。若い人には、全国各地から来られているボランティアの強者に会うことは勉強になるし、刺激にもなります。かつての自分もそうでした。そのような機会がなくなっていくことはとても残念でした。ベースに宿泊しながらボラセンで活動している方もおられたので、今後はそのような選択肢も検討したいと思いました。

社協の代わりに活動は、聖心会のシスターの修道院の庭の雑草取りと、原町教会の剪定、さゆり幼稚園の見守りでした。庭の草刈りは、草ぼうぼうの状態から綺麗になったのでやった甲斐があり嬉しくなりました。原町教会の剪定は、始まってすぐに瀬川さんが蜂に刺されてしばらく一人ですることになりましたが、コード式の剪定機をうまく使えず何度も電気コードを切断してしまいました。エンジン式の草刈機と違いコードがあるとやりにくさを感じました。さゆり幼稚園の夏の預かり保育の見守りでは、8月4日の震度5弱の地震の話をしたら、子どもたちの表情が変わりました。さっと頭をかかえる子、「机の下に入った方がいい」と教えてくれる子……。徳山では避難訓練の状況がわかってない子もいますが、南相馬の子たちは真剣そのものでした。園児は東日本大震災を体験していないので、親や周囲が、危険と対処方法を教えているのでしょうか。防災への意識の高さを感じるとともに、地震・津波の怖さを今も抱えて生活されている方のことを思いました。預かり保育の初日は恐竜・魚の貯金箱の制作をしました。すぐに「できない」と諦めてしまう子が多かったのが気になりました。難しいことでも挑戦して「自分にもできた！」と自信を持つ体験が少ないように感じました。困難を乗り越えるためには先生・保護者の丁寧な関わりが欠かせません。子どもと関わるゆとりが持ててないように感じました。2日挟んで、今度は動物貯金箱の制作をしました。前回、大人に手伝ってもらったにしろ完成できたので、今回はすぐに諦める子はいませんでした。やはり、やり遂げた自信が次の挑戦につながることを感じました。別れ際に「貯金箱ありがとう！」と言いにきてくれる子が2人いました。先生に言われるのではなく、自分から「ありがとう」と言いにきてくれて嬉しくなりました。そのような行動が頻繁に見られるようになって欲しいです。手回しオルゴールで「となりのトトロ」「アンパンマンのマーチ」などの曲を楽しみました。なかなか静かに曲に聞き入ることは難しかったですが、翌日には「新しい曲、持ってきた？」と聞いてくる子が何人かいました。次回には新曲を用意しようと思います。

全体を通して

ボランティアの期間、朝の共同の祈りをし、幸田司教様のミサに与り（2回私も司式もさせていただきました）、共に食事をし、体験を分かち合い、夕食後も交わりの時間が持てました。徳山では共同生活もなく、幼稚園の仕事で明け暮れます。良い気分転換もでき、恵まれた時を過ごすことができました。ベースの方々、桃などの差し入れをしてくださった氏家さん、お祈りと募金で支えてくださった「詩編の会の皆様」、シスター熱海さん、留守を守ってくださった徳山教会の方々、そしてイエズス会の最終誓願の恵みとボランティアの恵みをくださった神様に感謝いたします。被災地の皆さんの思いを胸に防災講座を頑張ります。